(発行所)
横須賀市船越町
栄光学園新聞部
編集責任者

Eiko News Flash

予定

キャンプ　七月二八日―三一日
高一、三　八月一日―四日
中一AB　一日―四日
中一CD　五日―八日
中三　九日―一二日
補講会(高三)　一七日―二〇日
夏期学校　九月一日―四日
修学旅行　六月一日―九日
新学期開始　九月九日

記録的な大盛況
学藝会に人氣集中
第六回創立記念祭

栄光学園第六回創立記念祭は、六月二十日、二十一日と二日にわたって開催された。

定例の部部活動発展展覧会は、講堂二階に新築された部屋と、高校々舎二階教室とに於いて開かれたが、昨年理科校舎一杯に溢りひろげたのに比して、顧ぶれが大変淋しく感じられ、写真部、書道部、図画講演が参加したのみであった。

呼物の学芸会は、例年通り土曜日に高校生、日曜日には中学生と二日にわたって、新設なった講堂で盛大に行われた。

両日ともに朝天に恵まれ、午前中から、父兄の方々や、今年特に目立って多かった他処の学校の生徒さん方が、続々つめかけられ、体育館内に設けられた父兄有志の方、卒業生のみなさんによる軽食食堂は大繁昌、午後に入って、さしもの調理も間に合なくなってしまった。

午後一時、合唱部の合唱に始まった学芸会は、順調に次々と進み、ヘルヴェック先生の指揮による二部合唱が、高等学校有志二十数名によって行われた。歌は〝一緒に歌おうじゃないか〟(原名Let's sing together) の中より七曲を選び、高三　君の解説を挿入し、例の如く〝Pirates Song〟に移った。

中学演劇部員による食べてばかりいたというほか何だかわからなかった劇〝バナナン大将〟高一A　君の巧弁論に優る演技に疲き校長先生は次の如く検認された。

〝栄光はここ数年間に進歩し良くなっている。これは単に設備校舎が良くなったというとだけ道を作り、その道をどんどんと歩いているからである。従ってこれからも、栄光をより立派な学園とするために、現在の状態の維持に止まらず、一層努力しましょう〟

写真説明　ヴェニスの商人の一場面。
向って左からアントニオ(　　)、バッサニオ(　　)ポーシャ(　　)、シャイロック(　　)、大公(　　)

この後、二十分間の休憩があって、特設食堂は大賑った。

ついで始まった第二部は、〝ケンラン豪華な英語劇〝ヴェニスの商人〟で幕を開けた。校長先生直々の御演出によったこの劇は、皆が筋をよく知っていた為、例年程に不評ではなかった。日曜日にはこのあとに来賓の方によるおもわぬ飛入りが観客を喜ばせた。

父兄、卒業生を来賓に迎えてそのあと行われた中一による各組対抗の歌合戦は、メイ調子に爆笑連続、結局熊野先生御仕込みのO組が、最事優勝した。

学芸会の終後を飾った演劇部公演の昼間劇〝三年級太郎〟では、金員が日頃の練習の成果を存分に発揮し、物理部員による新聞入のスポットライトの効果も手伝い、そしてその上、劇の最後に出演する中三　君の花像姿が圧倒的人気を呼び好評裡に、第六回創立記念日学芸会は終了した。

学芸会第二日目の高わぬ拍いものであった飛入りについて、見なかった大部分の高校生の方に紹介しよう。

来賓として来ておられたヤング大尉の令嬢ジョーンさん(16)が飛び入りの主で、豪華な大型アコーデオンを胸に、続けて数曲〝剣の舞〟「懐しのヴァージニア」他を堪上手糸の調べを聞にして鮮かにひいて、満場の大喝采を浴びたなおジ線は、その後数日立って驚異的な熱練ぶりを、朝日新聞紙上にも紹介され、日曜の舞台にも立った。

論説
1 文芸活動を望む

最近の湘南高校の新聞の学園欄の所に、栄光がとり上げられていた。それは大分お世辞のようにも良えることであったが、その中に理科長開放び、その活動について、賞めることばが載っていた。

これはあちこちで云われることで、確かに理科関係は優秀であるらしい。が、文芸方面に於ける栄光は、不良といえるとも云われる。名称が付け新聞も雑誌も一応揃っているが、一寸も寂しくなるようである。我々新聞部員も痛切に感じる所で、異存はないと思う。

これは一度に、恨みがましいようであるが、部員がけにあらずして、大いに部外者に関与することである。大体、栄光には文芸方面に興味を抱く人は非常に少いように感じられる。そして程度が低いように思われる。

多くの他校には文芸部というのがあって、夫々その方に精進しているようである。だからたまには(いや、しょっちゅうかも知れない)校内雑誌、新聞などにもこれらの寄稿があって、大いに小説、詩などで賑わうのである。何も全面的に真似をしろというのではないが、ある程度真似をしてもよいことだと私などは錯覚せずにはいられない。こんなことをいうのは少々シャクだが、凡そ、我々の新聞には文芸的なものが出たことがない。こゝらで少し出てもよいのではないかと思う。そこでその端緒(とは失礼かゝとして、他間に諸兄の積極的な投稿、寄稿を望むこと切である。

2 試験の情報

こゝで今度は前号の論説続きのようなことをいってしまうがどうも致し方ない。現象であるが、実に消えない根性が特に高一の間に横行しているのである。

即ち試験の情報について、である。試験ありとの情報がゝゝゝ

學藝

詩

〝九月に〟

九月
掘りしめた砂の
おぼつかない手触り

狂熱した夏の波が去ってゆくと
砂浜に
針のように細く輝く
孤独な頃を見出す

暦を忘れられた貝殻は
冷めたく固く沈黙して
幻影を叶く事も無い

あの、夏の日の朝
神秘に包まれた波万の神に
ものの変はいを感じたけれど
何もやって来はしなかった
何も起りはしなかった
だが失らのである
今年の夏を　永遠に

先の途絶えたヨットのマストが
空しくなった「何故？」の影
目に映え来る湖の
水色の塗りも鋭せかかり
やがては消えてしまうだろう
湖辺の丘に
新しく白い墓ができて
いよいよ空は浸んでくる

そんな寂しい日の午後
砂浜に
時が風化してゆくのを眺めていると
蠢っては過ぎる悔恨の風の
間に間に
何か高貴なものの吹きが
静かに聞えて来たりする

〝湖畔〟

（山中湖の追憶）

鮮やかなりし若緑
初夏やどる白樺林
白雪頂く富士のかげ
水面に咲くたよとひぬ

その湖の水の冷
目に映え来るは深既の
その湖既の日の光？
我等なるかがそが湖畔
ひたひた寄せくるそが雰気
過去幾百年か変なく
過去幾百年か山噴えず

そら大いなる山上の
空に移れる蒐草
いづれ出てくる清流は
奔走として反逆くか

赤き燥き入日つつ
辺潮ふ甘き香
時ゆき夕闇迫るころ
孤立ち瑠る湖の河畔？

〝演劇寸評〟

「ヴェニスの商人」

何分に他国のものである薬罐劇では、日本人の肌には合わなかった。全体的に見てどうしてもしっくりとした感じは得られず唯出演者の努力を買うのみである。

薬罐の発音の方は校長先生の御仕込みで各人の批判すべき点ではないがあのゼスチュアに至っては恥かしい限りである。

既中陰気なユーモア味のそしい日本人には、身についていないから急にやろうとすると、局部的にだけ他国人のものが身につくのはいいたくないがおかしい。（といっても、これから薬罐劇などをやる方、などというのではないから誤解のないよう）何かいかにも未に竹をつけたという直感で、一度ならず二度褐冷汗を覚えた。その場限りの皮肉を吐く所のゼスチュアはよいが、その場面の終った次の瞬間からが、いかにも、手持無沙汰なぎこちなさである。つまり